

# ぷらすα

アルファ

No. 96

2013・春

松の木は曲がったままで  
真っ直ぐである

出居清太郎ワールドへのご招待

## 愛の交流

(1) 愛を差し上げて徳を積み、愛をいただいで心を養う。この愛の交流のうちに生成発展があるのです。

(2) 心をいつもつきたての餅のよつにやわらかく持つのが正しい心の持ち方である。

(3) 「他自共に…」であってはじめて天地自然の法則にそつことになる。

(4) 難有つて有難い、文字通りであります。

(5) 明日にどんなことが起きようとして、すべて神の配慮と信じている。

(6) 松の木は曲がったままで真っ直ぐである。

(1) 情は熱し易くまたさめ易い。愛は温泉のよつに、毎日毎日絶えることなく湧き出して冷えることはありません。

寂しい時は愛を下さった方を思い出しなさい。そしてひと言の言葉、一つの行いを、心をこめて人に差し上げるのです。

愛を差し上げて徳を積み、愛をいただいで心を養う。この愛の交流のうちに生成発展があるのです。

海でもその表面は、その時々々の気象条件によって、波立ったり、時には波が逆巻くこともあります。しかし海の底のほうは常に変わりありません。

人の心も、表面は、何かを見たり聞いたりするたびに揺れ動きます。好きだったものが、何か一つのことで大嫌いになったりします。タレントや俳優のファンというのは移り気なもの

でしょう。

条件によって変わったたりしない、深い所の心の常態、それが愛といえるでしょう。

Aさんは婚約者と遅い食事を終えてレストランから外に出ました。道路では何かの工事が行われており、交通規制の旗を振っている人がいました。小さな会社を起こしたばかりだったAさん、婚約者に言いました。「僕もあんな風に旗を振ることになるかも知れない。そうになったら、どうする?」。彼女は言いました。「その時は私も一緒に旗を振ります」。

私たちは両親をはじめ多くの人から愛を受けて育ってきました。その愛を、まわりの人たちに差し上げることによってまた私も、新たな愛をいただくことができるでしょう。

そのような愛の交流によって、私たちの愛をより豊かなものにしていきたいものだと思います。

(2) 包丁には包丁の持ちようがある。正しく

持ってはじめて用を足すことができる。

心にも持ちようがある。

心持ちというが、心をいつもつきたての餅のようにやわらかく持つのが正しい心の持ち方である。

このごろはもちつきの風景に出会うことはなくなりました。ですからつきたてのお餅の、あたたかさ、やわらかさ、ねばり強さを手に感じるができないのは残念なことです。しかし、イメージすることはできると思います。つきたてのお餅、それは私たちの心の理想の姿のイメージとして、実にピッタリではないでしょうか。さらに丸餅のまるい姿も理想の姿に加えることができます。

たしかに包丁は使い方を間違えるとたいへんなことになります。人をあやめる凶器になります。

す。

言葉もそうです。人の心に土足で踏み込むような言葉、人の心に刃をつきさすような言葉、人を針のむしろに座らせるような言葉もあれば、「あのひとで救われました」という言葉もあります。まさに両刃の剣です。

どつという言葉を出すか、あるいはどつという行いをするか、それは結局、心によって決まります。

私たちは、いつもつきたてのお餅のような心をイメージしながら、まるい、あたたかい、やわらかい、ねばり強い言葉を出し、行いをしていきたいものです。



(3)「自他共に…」という場合は自己中心の考  
えに立っている。人を立ててわが身が立つ  
のである。人を助けてわが身が助かるので  
ある。ゆえに「他自共に…」であってはじ  
めて天地自然の法則にそうことになる。

商売でも、自分だけが利益を得ようというや  
り方は結局ダメだ、というのは誰もがわかって  
いることでしょう。ただここで、「自他共」では  
なく、あえて「他自共」と言っているのは、「共  
に」という結果よりもむしろ動機を問題にして  
いるからなのです。

まず相手のことを考える、どうすることが相  
手にとって好ましいことなのか、どうすれば相  
手が喜ぶか、そう考えて行動するということ  
です。自分のことは後まわしにして、相手を思  
やる心です。そこには「他自共」というより、  
「自」はなくて「他」だけがあるといつていい

でしょう。

…大晦日の夜、老婆が来て、うちには正月  
を迎える餅もないと嘆いた。夫人は、家に  
あった少しばかりの餅をすべて老婆に与え  
た。元旦の朝、その家に年始に来た人が餅  
を持って来た…

「出せば入る」これが世の中の理(ことわ  
り・天地自然の法則)のようです。だから「人  
を立ててわが身が立つ」「人を助けてわが身が助  
かる」のです。

まず「出す」、そうすればどこからか「入っ  
て」くる。人の喜ぶことをしてあげる、する  
と誰かがうれしいことをしてくれる。こうし  
て結果として、「他自共に…」の世界が成り立  
つことになります。

(4) 人生行路における「難」は苦しく辛いも

のでありますが、その「難」によって力をつけていたかどうかであります。「難」を克服していけば、結果として有難いことになってまいります。ですから難有って有難い、文字通りであります。

スポーツ選手がインタビューで、苦しい練習があつたからこそ優勝できた、とよく話しています。また長い下積みの苦勞が肥やしになっているという演歌歌手の話もよく聞きます。

先ごろノーベル賞を受賞された山中伸弥教授も、医師として勤務していた若いころ、不器用で「じゃま中」と呼ばれていたというご苦勞の時代があつたようです。

誰にも、苦勞や困難はあるわけで、それを乗り越えることによって力がついた、人として成長したという経験は、誰にでもあることだと思

います。

ただ「難」に対する対応の仕方は一人一人さまざまでしょう。それによって成長の度合いも違ってくるでしょう。

「難」がふりかかった時に、ああいやだ、自分で自分が、と不平・不満、うらみ・つらみの気持ちを持つか、あるいは、これは自分が成長できるチャンスが与えられたんだ、有難い、と勇んで努力するか、そこに大きな違いが出てきます。

有難いと思つて、勇んで立ち向かえば、むしろ楽しいでしょうし、いい成果も得られて、有難いと思えることになるでしょう。

「有難う」という気持ちを「出せば」、「有難う」と言えるような結果が「入る」、「出せば入る」の理(ことわり)です。

(5) 私自身、明日の朝には血を吐くような試練が待っているかどうか知りません。なれども、今夜はゆっくりお風呂に入ってやすらかに寝ます。

明日にどんなことが起きようと、すべて神の配慮と信じているからであります。

通らねばならぬ道筋は、いやがおうでも通らねばならぬし、また通して下さるのだと信じているのです。安心しているのです。

「一寸先は闇」ということがよく言われます。まったくその通りで、次の瞬間大地震が起きないという保証はどこにもありません。

ですからイスラームの人たちは、何か約束をした後でも必ず、「神のご加護があれば」という言葉をつけるのだそうです。いくら自分が約束を果たそうとしても、それを妨げる事態が起こればできなくなるのだから、というわけです。

たしかにあした私の身に大きな困難がふりかかってくるかも知れません。逆にいいことがあるかも知れません。いずれにせよ、わからないことです。

そこで、「難有って有難し」だ、何が起こつても、それは自分が成長できるチャンスなのだ、神が自分にチャンスを与えてくれるんだ、という気持ちでいれば、なんの心配することもなく、落ち着いていられます。そしてもし困難な事態が起こつた時にも、神は私がキャッチできない球を投げたりはしないのだ、と思っていれば、ひるむことなく、立ち向かっていけるでしょう。これこそまさに、究極の危機管理といえるのではないのでしょうか。



カット・今井一博

(6) 松の木は曲がったままで真っ直ぐである。

それは自然の姿であり、自然のままの生活を素直に表しているのである。

ありのままの姿、ありのままの気持ち、それでよい。

杉や檜は直線的に高く伸びてさわやかです。

松は曲がりくねった姿に味わいがあります。いずれの木も、その木本来の姿がそのまま発現しているでしょう。それが「真っ直ぐ」ということでしょう。

果物や野菜も、多くの種類がありますが、それぞれの味があつて、それぞれにおいしい。それぞれの持つている真っ直ぐさが発現しているといつていいでしょう。

人も、生まれ育ち、性格・能力はさまざまですが、人としての真っ直ぐさを本来誰もが持っているはず。それを素直に発現すれば、そ

れぞれに幸せな人生を送ることができるのでしようが、人は植物と違って、我執があり邪念があるために、自分の本来持っている真っ直ぐさを発現できないのが現実です。我執や邪念を取り払ったところに出てくる言動、それが人としての真っ直ぐさだといえるでしょう。

我執や邪念を取り払ったところに見えるものこそ、「つきたてのお餅のような心」であり、そこから出てくる行いが「他自共に…」の行いであり、それが一時的でなく、常態となったものが「愛」にほかならないでしょう。



編集後記

リニユール『ぷらす』の第1号をお届け  
します。

出居清太郎ワールドの一端をお届けしました  
がいかがでしたでしょうか。

本誌を読まれての感想やご意見を是非、左記  
の発行所までお寄せください。

なお本誌は本年から年二回の発行となります。  
次号は十月一日発行です。

\*\*\*\*\*  
(H・Y)

『青年の皆さんへ』

出居清太郎ワールドへようこそ

新書版 144頁 500円

なにしろその世界は、広く、深く、そしてあ  
たたく、やわらかく、力強く、まさに「つき  
たての餅」のような世界です。

しかもなかなか一筋縄ではいかないところも  
あつて、しかし味わえば味わうほど味が出てく  
るといふ代物です。その味を味わうことによつ  
て、私たちの人生をより豊かに、より確かなも  
のにすることができると思います。

本誌発行所にて販売しています。

平成25年3月1日 ふゆのあり639号付録 ぷらす 平成25年春号(通巻96号) 編集・発行人 山本博也  
発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1 修養団捧誠会青少年担当 電話03-3971-1493